

シンポジウム／口承文芸研究と女性——研究史に根ざして

M・K・アザドフスキーによる「あるシベリアの女の語り手」について

萩原 眞子

はじめに

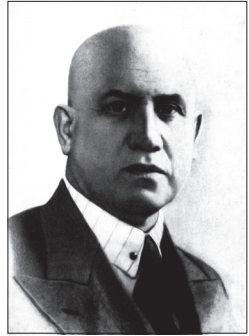
本例会のためにM・K・アザドフスキーの語り手論を紹介するようにというご依頼を二〇〇八年の初夏のころ企画担当の野村敬子氏から頂いた。氏は関敬吾がアザドフスキーの論文「シベリアの女の語り手」に啓発されて語り手研究を手がけようとしたいきさつを話され、本研究会のテーマに即してアザドフスキーを取りあげることの重要性を説かれた。(そのことは会報『伝え』第四五号でも触れられている。)

さて、関敬吾は「語り手研究の課題と展望——平前信を中心に」〔野村 一九八三 一一—〕で次のように述べている。「昭和一四年の末ごろ、たまたまロシアの民俗学者アザドフスキー(M.Azadovskij)の『シベリアの女の語り手』(一九二六)を読んで、昔話のタイプの研究以外にこうした語り手の研究がある

ことを知った。しかもその語り手は調査当時(一九一五)五〇歳を過ぎたヴィノクローワ(Natalia Ossipovna Winokurova)という女性である。この語り手もまたわが国の多くの昔話の語り手と共通し、女性であったことも、より一層語り手研究への興味を掻き立てたようである」〔関 一八八三 四頁〕。しかしながら、その志は戦争のために果たされなかったという。何がそれほどまでに関の心を捉えたのであろうか。そのアザドフスキー論文「あるシベリアの女の語り手」“Eine sibirische Marchenerzählerin” (FF Communications NO.68,p.3-70, 1926,Helsinki) で取りあげられているナターリア・ヴィノクローヴァ⁽¹⁾(一八六〇—一九三七)はシベリアの大河レナ上流地域にある都市イルクーツクから二〇〇キロメートルほど北のヴェルフネレナ地区チェルパノヴォ村の農婦である。アザドフスキーはヴィノクローヴァを「ロシア全国における昔話文芸のもっとも優れた語り手の一人、農民の社会環境で育まれた優れた民衆芸術家である」と称讃を惜しまない [Асадовский 1968:49]。本稿ではドイツ語論文の元になっている著述によってアザドフスキーのヴィノクローヴァという語り手について紹介することにしたい。⁽²⁾

一 M・K・アザドフスキーとその研究について

(以下はアザドフスキー 1968のB・N・プチャーロフによる序



M. K. アザドフスキー
(1960より)

文に基づく。

マルク・コンスタン
チノヴィツチ・アザ
ドフスキー(一八八八
―一九五四)は南シベ
リアのイルクーツク生
まれ。ロシア・ソヴィ

アザドフスキーのフォークロア研究の主要なテーマはロシア昔話であるが、シベリア調査でF・I・アクサメントフ、N・O・ヴィノクローヴァ、E・I・ソロコヴィコフという優れた語り手に出会い、テキストを採録。その出版では語り手たちの生活や環境の観察、生い立ち、語り手たちの昔話に対するかわりを総合的にとりあげた。昔話やその内容のディテール、語り方、主題の選択には語り手の個人的な始原があるという考え方は「ロシア学派」の特徴であるが、アザドフスキーはこの「ロシア学派」の命題を深化させた。アザドフスキーの影響を受け、その後長らく「語り手」はソヴィエト昔話研究の主要なテーマとなり、一人の話し手の昔話集が学術出版の主要な位置を占めた。⁽³⁾

アザドフスキーは、また、昔話研究と並行して一九二〇年代初めには「ロシア学派」の原理を民衆の泣き歌という特殊なジャンルに適用する試みを行った。アザドフスキーを惹きつけたのは泣き歌の儀礼的要素、古典的なモチーフではなく、その芸術的な内容、そのなかの「個人的な発想」、即興的なものと伝統的なものとの組み合わせであった。論文「レナ川の泣き歌」は民衆の泣き歌を美学的に重要な現象と捉え、一連の全く新しい歴史・民俗学上、理論上の問題として提示し、シベリアの民衆文化の研究の必要性を喚起した。

もう一つの研究の柱はロシアフォークロア研究史とロシア文学、社会思想におけるフォークロリズム、一八世紀末―一九世

エトの民俗学者・文学者・民族学者である。一九一三年にベルブルグ大学歴史・民族学学部を卒業。トムスク大学、イルクーツク大学、レニングラード大学で教鞭をとる。特に、フォークロア研究者としてはレニングラード大学のフォークロア学科学科主任をはじめ、民族学研究所および科学アカデミーロシア文学研究所フォークロア部主任を務め、シベリア奥地で民俗学の調査を行った。アザドフスキーの関心は多岐にわたり、しかも非常に目的意識的である。すなわち、民衆の創造の理論や歴史、ロシアフォークロア研究史、フォークロア・民族学の調査法、デカプリスト運動とデカプリスト文学の歴史的研究、シベリア文化研究、文学史としてプーシキン、ヤジィコフ、ツルゲーネフ、コロレンコの研究、文学と社会運動の関連、一九世紀ロシア文学のナロードノスチとフォークロアの関連についての研究などである。長年にわたり、ライフワーク『ロシアフォークロア研究史』を手がけたが、その第一巻はアザドフスキーの死後、一九五八年に刊行された。

紀前半のロシア文学におけるフォークロリズムの解明であった。ラデイシエフ、デカプリスト、プーシキン、レールモントフ、ベリンスキー、ゲルツェン、ドブロリユーポフ、チェルヌイシエフスキーなどがロシアのフォークロア的な思考の豊穡な流れであること、それが民衆詩学に対する唯物史観の発展にとって、また、民衆詩学の伝統をロシア文学が摂取する上できわめて重要であったことがアザドフスキーの研究によって明らかにされた（これに関連しては、例えば、藤沼 一九九九 参照）。

M・K・アザドフスキーの語り手研究の主要な著作をいくつか以下に挙げる。

『レナ河の泣き歌』（一九二二 チタ）、『レナ河上流地方の昔話』（一九二五 イルクーツク、一九三八 改訂版）、『ロシア昔話・秀逸なる名人たち』二卷（一九三二 モスクワ・レニングラード）、『マガイの昔話』（一九四〇 レニングラード）、『カレリア地方のロシア昔話』（一九四七 ペトロザヴォトスク）、『ロシアフォークロア研究史 Ⅰ―Ⅱ』（一九五八、一九六三）、『文学とフォークロア論集』（一九六〇 モスクワ・レニングラード）他

二 ナターリア・O・ヴィノクローヴァ

― 昔話の変容・語り手の個人的創造性

アザドフスキーにとって昔話の語り手を研究する意図は、口

承文芸における変容がどのように生ずるのかという問題をロシア昔話について実証的に解明することにあつたといえよう。A・F・ギリフェルディングによる北ロシアのヴィリーナ（英雄叙事詩）、V・V・ラドロフの北方テュルク諸族の英雄叙事詩、B・Ya・ヴラジーミルツォフのモンゴル英雄叙事詩の研究から語り手によって創造的な変移変容がなされるという叙事詩語りの実際が明らかであった。その研究の潮流にアザドフスキーの研究もまた位置づけられる。

さて、アザドフスキーはヴィノクローヴァをロシア昔話における「写實的・心理学派 (реально-психологическое направление) のもっとも輝かしい優れた代表者である」として、その昔話の特徴は（一）農婦、すなわち、女性の昔話、（二）貧農の昔話、（三）貧しいシベリアの農婦の昔話であると簡潔に述べている [Аздовский 一九三二 三七一]。

まず、女性の語り手としての特徴は、そのレパートリーに女性の主題が顕著なことである。「忠実な妻」、「賢い嫁」、「商人の娘と泥棒」、「商人の娘と御者」、「不実な姉妹」、「大臣の妻」などがあるが、何よりもヴィノクローヴァは格別な心情と優しさをもって「母親」像を語った。例えば、不実な嫁や姉が処罰を受ける場面で、ヴィノクローヴァは決して「死」をもってすることはなく、また、子供を気遣う母を語る際にはその語り口は慈愛に満ち、常に特有な繊細さと心理的な機微に富んでいる。

アザドフスキーはロシア昔話の語り手はおしなべて「貧し

い農民、社会的な貧困層」に属していると繰り返し主張する。ヴィノクローヴァの語りにも貧しさ、貧しい人々の立場が明確であるが、かといってそのこと自体で語りのスタイルや語り方が異なるイデオロギーに転換される要因とはならない。その語りに独特なニュアンスが付加されて、話の筋や前提が造り変えられる。その好例として、森番の老人が貧乏人を蔑んだ養子を次のように論ずる場面がある。「貧乏な男がどうして立木を伐つたりするものか、その人から罰金をとっちゃいけないよ。貧乏人を虐めてはいかん。」また、ある商人は死に際に、「金持ちから借金を取り立てなさい、だが、貧乏人の借金は帳消しにするように」と遺言する。

ヴィノクローヴァのいたチエルパノヴォ村は南シベリアのレナ川上流にあるが、その近傍の町イルクーツクはロシア帝政によるシベリア征服、開発の拠点であった。十八〜十九世紀を通じて、その辺りには鉱山労働者、流刑囚などが送り込まれ、また、一八〇〇年代後半の社会的変動の結果、ヨーロッパ・ロシアからは数多の移民、放浪者、浮浪民が流入し、その数は六〇年代には二、三万人にも達していたという [Asadowski: 1926: 27]。ヴィノクローヴァの語りにはそのようなシベリアに固有の日常的な状況が反映され、(ア) 隠遁者、放浪者、浮浪者、(イ) 一夜の宿、(ウ) さまざまな生業、浮送、御者、狩猟、筏や鉱山労働者の雇用などのモチーフがとり込まれている。「金持ちマルコと不幸者ワシリー」では通りすがりの乞食が一夜の宿を

求めるが、他のテキストでは家畜小屋や牛舎があてがわれるのに対して、ヴィノクローヴァは空いた部屋を提供する。同じ話のなかで不幸者ワシリーの父親は「村一番の水先案内人」であり、また「賢い妻」ではレナ川の貴金属採掘や材木の筏流しが投影されている。さらに、バーバヤガーの鶏の脚のうえにあるロシア式の農家は「木造の狩り小屋」にとつて代わる。

アザドフスキーは同じ主題の昔話が語り手によってどのような差異をもっているかについて比較検討し、その差異や変容の起因の一つとして語り手が置かれている地理的・社会的環境が大きく影響していることを明快に説いている。しかしながら、語り、すなわち、伝承における変容はそれだけに帰せられるわけではない。アザドフスキーはヴィノクローヴァの個人的な特徴として、その語りでは昔話の規範を「軽視」し、はじめりや結末の句、前置き、きまり文句が極めて稀で、昔話の三の数の形式を守らず、繰り返しを避けるといふことなどを挙げている。かの女は話の本筋を急ぎ、あたかも何とか話を早く終わらせようとするかのようなが、主題やエピソードが数少ないために一貫性がある。その一方で二、三のエピソードについてこと細かに語るが、それは必ずしも主題を展開するうえで中心的ではない。ここではヴィノクローヴァは昔話の語り的一般的な伝統から逸脱し、例えば、昔話「魔法使いとその弟子」では馬に化した息子を手放し、息子と二度と会えなくなった老人の身になって、その後悔と嘆きを語る。その写実的・心理学

的な特質こそがヴィノクローヴァという語り手の本領ということになる。アザドフスキーによれば、このエピソードは昔話のドラマチックな状況を深め、「表面的な不可思議のなかの人間性に最後の一筆を加えた」といい、ヴィノクローヴァにおける人間像の活写のしかたは、「意識的な計算ではなからう。そこに表出した芸術的な直感によって、彼女は他の状況、他の文化的環境のなかでなら優れた芸術家・物語作家になれたであらう」と述べている [Азадовский 1960: 59]。

むすび

『ロシア昔話・秀逸なる名人たち』には十五人の語り手についでで紹介と、その語りによる昔話が収められている。ヴィノクローヴァの昔話として「鷲王子とその息子」、「魔法使いと弟子」、「弟と姉」、「ベルフィルのこと（四人の兵士を司祭が葬った）」の四編が収められている。テキストはいわゆる標準的なロシア語ではなく、語り手の方言である。アザドフスキーの語り手論は語り手各々のテキストの分析を踏まえた比較研究である。それは口承文芸が語り手の人生そのものをフィルターとして伝承されるという紛れもない真実を明らかにしている。B・Z・ブチーロフはアザドフスキーの昔話に対する基本的な考え方について次のように述べている。「昔話は芸術作品と同じように、伝統的な素材に語り手が積極的・創造的に介入すること

によって創られる芸術現象として捉えられる。昔話の芸術的な作用、その理念的な志向性、現代とのかかわり、昔話の詩学と形式の具体的な特徴はある社会的環境の下でのものの見方や雰囲気表現する語り手の創造的な働きかけによって示される」 [Путилов 1960: 6]。

参考文献

- Asadowdki, Mark 1926 Eine sibirische Märchenzählerin, FFS 68
- Азадовский Марк Константинович (アザドフスキー)
- 1932 Русская сказка. Избранные мастера. Л.
- 1960 Статьи о литературе и фольклоре. Москва-Ленинград.
- 1932(1936) Русские сказочки: p. 15-79
- 1940 Сказочник тункинской долины: p. 80 -113
1922. Ленские причитания: p. 114-174
- Новиков Ю. А. 2000 Сказитель и былинная традиция. С.-Петербург
- Путилов Б. Н. 1960 Предисловие ко книге «Статьи о литературе и фольклоре» М. К. Азадовского
- アフナーシエフ (金本源之助訳) 『ロシアの民話』一九八一(一九七二) 岩崎美術社
- アフナーシエフ (中村喜和編訳) 『ロシア民話集』上下 一九八七 岩波文庫

- 石井正己編『昔話を語る女性たち』二〇〇八 三弥井書店
- 熊野谷葉子「ロシアの口承文芸」(日本口承文芸学会編)『シリーズことばの世界 第一巻 つたえる』二〇〇八 三弥井書店
一四二―一五三頁
- 齋藤君子「伝承者理論から見たロシア口承文芸学」『口承文芸研究』第十四号 一九九一 八八―九三頁
- 「ロシアの語り手」(日本口承文芸学会編)『シリーズことばの世界 第二巻 かたる』二〇〇八 三弥井書店 二〇六―二二七頁
- 関敬吾「語り手研究の課題と展望―平前信を中心に」(野村純一編)『昔話の語り手』一九八三 法政大学出版局 一―十一頁
- 田中泰子(訳)『ロシアの昔話』(世界民間文芸叢書 第四巻) 一九八六 三弥井書店
- 野村敬子「語りの回廊 聴き耳の五十年」二〇〇八 瑞木書房
- 野村純一編『昔話の語り手』一九八三 法政大学出版局
- 藤沼貴編著『ロシア民話の世界』一九九一 早稲田大学出版部
- 渡辺節子編著『ロシアの昔話を伝えた人びと』一九八七 ワークショップ 80

注

(1) この人名表記には ヴィノクローワ、ヴィノクローワがあるが、ここではヴィノクローヴァとする。

- (2) 一九二六年にヘルシンキの HCCommunication 誌に掲載されたドイツ語版の元になっているのは『レナ川上流地方の昔話』の序文「ロシアの語り手」である。この書の編集は一九一五年になされたが、出版はロシア革命を経た後の一九二五年である。〔齋藤 一九九一 八九―九〇〕。
- (3) ソヴィエト・ロシアにおける伝承者に関する研究史とその動向については齋藤君子の優れた紹介がある。〔齋藤 一九九二〕
- (4) 一例としてアフアナシエフ(中村喜和編訳)下『金持ちマルコと不幸者ワシーリイ』(おぎはら・しんこ／帝京平成大学)